

<研究ノート>

家庭科における環境を考えた消費者教育実践から －指導者の意識変革をねらう題材－

Practice of consumer education considering environment in home economics

中島 保子¹

要 旨

小学校家庭科の指導者は、専科担当であれ、担任であれ、一番にその人自身が「生活する人」であることが望ましい。なぜなら、家庭科は単なる生活への適応のために、知識・理解を得たり、技能を習得したりするだけの教科ではないからである。実生活における課題を実際に解決できる能力を養うことが期待される教科だからである。だから、指導者自身が生活を大切にしている生活者であること、指導者自身が生活することにもっと目を向け、常に世の中の動きに敏感であることが大切なのである。

しかし、今小学校教師を目指す学生たちの現実には、生活者とは程遠いところで生活している者も多く家庭科教育法の授業などでそのことに驚かされる。

そこで、小学校の家庭科の題材を通して、学生たちをもっと生活の中に引きずり込み、「生活者としての自覚」をめざめさせるくふうのあれこれを試みた。

キーワード：環境、消費者教育、地産地消、フードマイレージ、伝統野菜

environment, consumer education, local production for local consumption, food miles, traditional vegetables

1 はじめに

平成23年4月全面実施の今回の学習指導要領家庭⁽¹⁾では、内容構成に大きな変化があった。8内容から4内容へスリム化されたことである。小・中学校の家庭科、技術・家庭科の枠組みを同一にすることで系統性・連続性を重視し、生涯にわたる家庭生活の基礎となる力を育成しようという意気込みを感じる。本当に子どもたちを「生活する人」としてとらえ、この先ずっとよりよく生きるために大事なことを身につけさせようとの改訂と捉えている。

家庭科の目標「衣食住や家族の生活に関する・・・」というくだりは家庭科の芯をなすもので普遍のものであるが、この度は社会的に影響のある「食育基本法」が成立し、基本計画が発表された段階で教科の中では一番縁のある家庭科が中心になって食を考えることが必要になった。また、以前の学習指導要領までは、(特に小学校においては)環境や消費者の視点はそう強くないものであったが持続可能な社会の構築などの文言がのるようになり、社会の変化に対応して主体的に生きる消費者としての態度を育成するため

に小学生といえども「生活する人」として消費者教育、環境教育を施していくことを考えねばならなくなった。

指導者の視点にそのことを十分心得た上で家庭科の構築をすることが肝要となった。

大学では毎学期、初回に学生に今まで受けた家庭科のことであるとか、自分がどれくらい家庭の仕事に関わっていると思うかを自由に記述させているが、学生は自覚して自分はいまだに関わっていないことを認めているものが多い。このことから私は、家庭科教育法の中で指導者自らが持続可能な社会の構築を行う社会の一員として、主体的に生きる消費者たるよう、「生活する人」の育成のため以下の指導計画を工夫、試行した。

なお、ここでいう「生活する人」とは私の思いで、家庭生活(私的な消費生活)をする中でよりよい生き方を目指して自分、又は他者と共同して働きかける人、つまりは日々の営みに自分も参加している(意欲的にが望ましいが)人というぐらいの意味である。

2 指導計画のしかけ

家庭科教育法全15回の講義の中で全体の3分の1を各内容について概観し、3分の1を指導案作り、模擬授業をする。残りの3分の1に自分の家庭と関わらねばしかたがなく、「生活する人」とならねばならない授業を組み込んだ。その例として次のようなものを仕掛ける。

- (1) 魔法のタワシ作り
- (2) 我が家のゴミだし、我が町ゴミ探検
- (3) フードマイレージ買い物ゲーム
- (4) ふるさと野菜
- (5) 発表会

以下(1)～(5)の授業展開を順次解説する。

3 授業について

(1) 魔法のタワシ作りと家庭での実践レポート

(ねらい) 家庭科は、作業する中で考え、考える中で続け、習性となるようにする。

15回のうち早い時期にアクリル毛糸を使って魔法のタワシ作りをする。保育園や幼稚園の児童でも可能な「ゆびあみ(ゆびりりアンあみ)」⁽²⁾を用い授業時間内に作って持ち帰り自分が使う。

- ・(準備物など) アクリル毛糸 1玉 40グラム
タワシ1個分は約6～8グラム

授業の中で1人1個～2個作り、家に持って帰るよう指示する。作り方は「みんなで楽しむゆびあみ」のホームページ参照

魔法のタワシの効能を理解させる。アクリルの特性を用いたもので洗剤を使わなくても食器洗いができる。すなわち環境に負荷をかけることが少なくなるなど。

実際に家で魔法のタワシを使って食器洗いをし、結果をレポートにまとめて提出する。(期間を1月ほど与える)

この授業で狙うのは「家の仕事に目を向けさせる」といってもきっかけがないとにくいものなので強制的ではあるが自分の作ったタワシを試す課題を与え参加を促す。

この手法はかなり効果的であり生活科や、家庭科など実践を大切にせる教科には使えることを学生は身を

もって知るようだ。

<レポートの抜粋として>

- ふだん家では食洗機を使用しているが、今回1日分の食器を魔法のタワシで洗った。コップ、食器。箸は洗剤を使わずにきれいに洗えた。さすがに油とこびりついた焦げ目はとれなかったが、ふだんどれだけ余分な洗剤を使っているかが分かった。
- ・・・(魔法のタワシは)そんなに手間がかかるわけでもないし、こんなことでエコにつながるのなら今後続けてもいいと思った。・・・今回のように実際にエコにつながるものを作るという体験をすることで楽しみながらエコロジ的に活動しているというのを感じながらエコに取り組んでいるので子どもたちにエコというものを理解させる効果的な活動と言えそうだ。
- 私の家は7人家族、毎日3食分の食器を洗うと2週間ぐらいで毛糸の繊維が傷んでタワシが汚くなった。魔法のタワシは作るのが簡単で低価格、洗剤を使わなくても汚れが落ちるというメリットもあるが、その分もろいというデメリットもある。

学生は真剣にこの課題に取り組み、何よりも台所に入って仕事をしたということが大事なことでありこの試みは有効であると感じた。

(2) 地域のゴミ収集について調べる

(ねらい) 自分の考えを持つことと、人の考えを聞き自分の考えを高めていけるようにすること。

- ・自分の家のゴミはいつ誰が出し、どのぐらいの量があるか調べる。
- ・住んでいる地域のゴミ処理に関する状況を調べて自分のうちのゴミ状況と関連付けて考える。
- ・家庭ゴミの処理と地域について現状と課題を環境の視点からレポートする。

この課題に対しては、見本(吹田市)の自治体のパンフレットやゴミ分別、収集の場面を収録したビデオ視聴のみで「調べる」活動に入ったため、深まりが感じられなかった。自治体によって違うことや収集と処理のしかたが分かってもいまいち暮らしを切実に感じさせるにはいたっていない。

次回はもっと自分の家のゴミの始末にこだわらせたとえば、「我が家のゴミカレンダー作り」のような自

分の家のゴミが環境行政にどうつながっているのか、
「自分の出したもの」の行方にもっと目を向けさせて
みようと思う。

(3) フードマイレージ「買い物ゲーム」

(ねらい) フードマイレージを学び、食が交通、消費、
環境などいろんなものとつながりがあると
いう考え方に会おう。

フードマイレージ買い物ゲーム⁽³⁾

フードマイレージ教材化研究会「食と交通と環境」
増補版参照

(準備物など) あおぞら財団より教材セット

(小学生用)「食材カード」「交通手段カード」「お店
選択カード」

ワークシート「夕食のメニューを考えよう」
食料自給率の資料 など

4～6名の班を作り、まず夕食のメニューを考える。
その食材を購入するにあたり購入のための交通手段を
含めて買い物ゲームをする。

メニューは班の話し合いで、一つの家族を想定する。
予算は主食、調味料を入れずに班あたり1400円として
概ね4人家族を想定する。

あおぞら財団作成の食材カード(小学生用 39品
目)を用いて班の全員で買い物をする。学生もこれは
ワクワクするらしく真剣に話し合って買い物をする。
この後もプログラムはテキストを利用してもよいがあ
まり膨らませすぎず純粋に買い物に焦点を当てるのが
フードマイレージの考え方に会ったときのインパクト
があるようである。予算が決められているので金額
に縛られ、どうしてそれを選んだのかを発表させると
本音が出てくるところがおもしろい。各班の考え方を
発表させ食材カードを使って十分意見を出させると実
物を扱うのと同様の効果が期待できる消費者教育を展
開することができる。

産出国(県)、輸送の距離、輸入の様子、食料自給
率そして、フードマイレージの考え方を導入する。

食材カードは食品が写真で表され産地と値段が添付
されている。カードの裏には★印でフードマイレージ
に関わる情報が載せられている。ジャガイモなどは北
海道産120円と兵庫産140円の2つを用意しており、そ
れぞれの★は15と1である。

★のマークは「フードマイレージに関わること」を

買い物ゲームの終わりに告げるのであるがここからが
本題に入るところである。多くの学生は買い物ゲーム
で予算内で買えたことや自分たちがよい買い物をした
ことに大変満足していたが★の数を計算し少ない方が
地球にとって優しい買い物であったことに気づき驚き
の声をあげる。多くの学生がフードマイレージという
ことばになじみがなかったようでそういう考え方もあ
るのだと気付く。

買い物ゲームで地域にある野菜や特産物に目が向
く。次の課題への布石として「自分の住む地域にはど
んな野菜が出回っているのか買い物を通して調査す
る」ことを伝えておく。(正月など、帰省の折や特別
な行事があるときに遭遇するように仕掛けるとやりや
すい。)

小学生の指導の時期についてはいろいろ考えること
ができ、たとえば、5年生で行うなら青野菜について
の一通りの学習を終えた時点で取り上げるのがよいか
もしれないし、6年生なら、すべての基礎的な食品を
学習し終えてからが面白いだろう。

小学校家庭科で何度か行う調理実習に際して食材を
見極める目を養わせるチャンスがあるが、家庭におい
ては、日々の暮らしにおける食材の買い物の経験が少
なすぎる。学校でも調理実習に使うものを自ら選ぶ経
験をさせていくとよいのであるが、好条件の販売店が
あるわけではなく、結局指導者が選び、説明するだけ
になる。そんな時今回用いたあおぞら財団の「食と環境、
消費」に関わる学習キットは使いよいものである。

「はじめに」でも述べたように「食育」を推し進め
ていくとき、決して多くない家庭科の時間を有効に
使って推進する価値があると感じられる。

学生が実際にゲームを体験したあとで「自分が指導
者だったら」このように指導するということを考えた
ものが多数いたことはゲームの有用性を示しているも
のと思われる。

(4) ふるさと野菜

(ねらい) 自分の住む地域の特産物を調べる

学生が「フードマイレージ買い物ゲーム」から地産
地消の考え方が大事であると理解した段階で私は大学
構内で育成中の「吹田くわい」の実物を見せ、「吹田
くわい」がなぜ大学構内で栽培されているか、これに
まつわる話を聞かせながら「なにわ伝統野菜」の説明
を試みた。

学生を出身地域または、現在住んでいる地域などで
分け、ふるさとを語りながら食、食文化について自ら

の地域の特産物（特に伝統野菜）を調べることを課題にした。長期休みを挟んでまとめたものを交流、発表（プレゼンと提出物）させた。総合的な学習の時間にあるような調べ活動の授業風景ではあるが学生の調べ活動第一段階は、携帯電話による検索である。小学生とはちがう風景であるがコンピュータでの資料に関してはニュースが新しいのはよいが正しさの面では吟味を要することを付け加えた。

参考文献

- （１）小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省 東洋館出版社 2010年
- （２）<http://www.yubiami.com/seconds/kouza.html>
篠原くにこ@みんなで楽しむゆびあみ どっとこむ
- （３）「食と交通と環境」フードマイレージ教材化研究会 増補版 2008年 1～6

（５）発表

（ねらい）自分の考えをしっかりと説明できること。その際、絵や図表などを効果的に用いた活動を工夫すること。

家庭科だけではなくすべての教科において「言語を豊かにし知識及び技能を活用して生活の課題を解決する能力を育む視点の重視が言われている」が課題解決のため自分が理解するとき同様、人に伝えるとき共感を持って傾聴したり、いっしょに考えてもらうために何をどんな形で提示すればよいかまた、人にうまく伝えるにはどんな方法がよいかを考えさせた。「発表会」を設定することにより意欲が増したようである。以下数点を紹介する。

- 「京都山城たけのこ」 小さい頃からのたけのこ堀の経験や、おいしく食べる料理レシピなどを新聞形式でまとめる。自分の経験を前面に出し、インタビューなどないように活気がある発表であった。
- 「いかなご」 高校時代通った駅で季節になると流れるいかなごの歌を紹介
- 天王寺蕪について吹田くわい同様、市内小学校で栽培していることや教師になったときの取り組みについて言及しているもの
- 「我が家のおせち」の紹介など、発表の後の交流は盛り上がりを見せ環境を考えることの一つに伝統を知ること、子どもたちに伝えることを学び取ったようである。

おわりに

フードマイレージのゲームの後には、フェアトレード問題、その他食品の安全性に関する問題などもう少し深く掘り下げるべきであったが時間切れになった。しかし、家庭科教育の中で指導者の意識の変革を狙う題材の開発という点では概ね達することができた。